

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝



## 「優しいうそ ～バスの来ないバス停～」

認知症を患ったお年寄りが、むやみに外に出てしまうのを防ぐため、施設の玄関前に『バスの来ないバス停』を設置する介護施設が増えている。『バスの来ないバス停＝うそのバス停』には、認知症の人の思いに寄り添いながら、命を守りたいという介護職員の願いが込められている。

「そろそろ夕飯の支度をしに帰らないと」、「病気の母親の看病をしに帰らなきゃ」・・・、今現在ではない記憶の中で生きている認知症のお年寄りは、「家に帰りたい」という気持ちにさいなまれる。職員はお年寄りの「帰りたい」という気持ちに寄り添い、「では一緒にバスを待ちましょう」と声を掛ける。安心したお年寄りは、『うそのバス停』のベンチで座って待つ。もちろん、待ってもバスは来ない。待っている間、体調や天気の話をして、「お茶でもどうですか」と誘うと、「そうだね」と言って穏やかに部屋に戻る。バスを待つ間に、気持ちが切り替わる。

バスが来るというのはいうそ、バス停そのものも偽物である。しかし、「家に帰りたい」というお年寄りの気持ちを否定したり、あなたの行きたい場所はないと伝えたりするより、ずっと優しい対応ではないか。相手の心を傷付けるうそはいけないが、相手のためにつくうそはオッケーではないか。優しいうそには、相手を思いやる気持ちが含まれている。正しさよりも優しさが大切である！



### とれたて直送便



## 「経験を積み重ねる手助けを！」

「友達に物を貸してあげられる子どもになってほしい」、「友達と仲良く遊んでほしい」と願っていても、子ども自身が「貸してあげたい」、「友達と遊ぶのは楽しい」と思える経験をしていなければ、行動に結び付かない。「食事に集中しない」、「着替えない」なども同じで、叱り付けるのではなく、動機や願望を育てることが重要である。子ども自身が葛藤しながらも望ましい行動を自分で選べるよう、大人は成功経験を積み重ねる手助けをする。

## 「心は皮膚にある？」

辛いことや悲しいことがあったとき、どんな慰めの言葉を掛けられるより、ぎゅっと抱きしめられたり、手を握ってもらったりすることで心が楽になる。子どもが転んだとき、「いたいのいたいのとんでけー」という言葉は、不安を和らげると同時に、注意を逸らす効果がある。更に患部にそっと手を当てて撫でてやると、痛みの程度がもっと軽減する感じがする。



心は脳や心臓であるという説を聞くが、「心は皮膚にある」という説もある。私たちは子どもに心を伝えたくて言葉を発するが、心を伝える方法は言葉だけではない。